

現代サッカーの育成年代における国際比較

-International comparison in the training age of present age soccer-

1K08B162-1 畠山 祐輔

指導教員 主査 太田 章 先生

副査 磯 繁雄 先生

【緒言】日本サッカー協会は、「JFA 2005年宣言」で「FIFAワールドカップを日本で開催し、日本代表チームはその大会で優勝チームとなる。」と誓った。そこでこの研究の目的は、日本がこれから世界ランク一位またはワールドカップ優勝を目指すためにそれぞれのカテゴリの育成や環境を今の世界で有名なクラブチーム、国と比較しながら日本には、なにが足りないのか検討し、日本から良い選手を育てることに必要なことはなにかを見つけることである。

【方法】日本と同じ、2010年南アフリカワールドカップでベスト16でありアジアである隣国の韓国、朴智星は今でも世界的有名クラブ、マンチェスター・ユナイテッドで活躍している。また、世界最高といわれ世界で注目されている育成クラブFCバルセロナ。そこでは、近年バロンドールを獲ったメッシ選手がいる。また、カンテラ育ちの有名選手がバルセロナでたくさん活躍している。このような選手を輩出するには各国、各クラブには素晴らしい育成環境が整っているのが理由であると思う。そこで、朴智星選手、メッシ選手はどのような環境、経歴、経験を経てここまで活躍することができたのか、そしてどのような育成方法で選手を育てていくのか日本の育成の仕方と比較していく。

このような選手の育成過程を調べていくことでこれから日本選手が世界の上位を目指す上での良い目標になるのかと考えた。また、環境が全く異なるが、二人の選手は世界のトップに君臨しているクラブに所属している。環境が異なる2人の選手が世界のトップにいるのであるなら、日本選手達にもそのチャンスはあるはずである。この2人のきっかけとなった育成と比較することで、日本選手が学ぶべきものがあるかどうかを検討していきたい。

これらの教育システムとトッププロ選手の経歴、環境、経験

を調べ、他の国、クラブの長所・短所をあげながら、日本アマチュア選手が他の国、クラブから学ぶべき育成方法や日本の育成方法で短所を改善するために必要なことを検討していく。

【結果・考察】

日本、韓国、バルセロナのカンテラのサッカーする環境は、様々であることがわかる。

- ・日本は、長期的視野に立った選手の育成をしていく。
- ・韓国は、勝利至上主義である。

・バルセロナのカンテラは育成した選手を積極的にトップチームに昇格させて試合で起用するという「文化」がある。

また日本という国はサッカーが一番という国ではない。そのため日本が強くなるには、総合的なアプローチによって「すそ野をひろげ、育成の土台の堅固にし、総合力を高めることで、頂点を高くする」、日本サッカーの真の実力、総合力をあげていくことが重要であると考えていくことが必要であり、日本中がサッカーを愛する文化が実現すれば日本がワールドカップ優勝まで遠くはないと感じた。

【結論】それぞれの選手育成の考えの延長には国独自の文化が現れていると強く感じた。そして、選手育成の考え方には、長所と短所がある。それには、歴史や社会的背景が大きく関わっている。そのため、どこかの国が、どこかの国の育成システム、指導法をそのまま真似をしても適さない。サッカーの選手の育成のためだけに、歴史や社会の構造を変えることは難しい。その国の歴史的・社会的背景を考慮し、他国の育成システムや指導法を真似するのではなく、参考にしながら、その国の長所を生かし悪い点を改善していくことが重要である。どの国もサッカーを強くしていくには、その国に見合った独自の育成システムを構築することが必要である。

